



## 第十五回 上田城

～表裏比興の者、徳川を翻弄す～

信州上田平、千曲川に寄り添うように建っているのが、真田昌幸の居城、上田城です。

豊臣秀吉(石田三成とも)は、昌幸を「表裏比興の者」(煮ても焼いても喰えない奴)と評しました。昌幸が時の権力者からこう評されたのは、秀吉の傘下に入る前に裏切りを繰り返して主家を何度も代えたからです。北条氏、徳川氏、上杉氏といった大々名に囲まれた弱小領主が生き残るには、そうするしかなかったとも言えます。

しかし、昌幸は、ただ実力者の間を泳ぎ廻るだけではなく、意地を通して闘う時は闘う人でした。その意地を通した相手が、二度にわたって徳川の大群を上田城で迎え撃ち、かつ、いずれも勝利を取っています。結果、後に続く次子の信繁(通称「幸村」)が、「徳川の毒虫」とまで呼ばれる下地を作ることとなります。

### 真田家の独立と上田城の築城

昌幸は、もともと武田信玄に仕え、信玄から「我が両眼の如し」とまで評されて寵愛され、順風満帆の道を歩んでいました。しかし、信玄亡き後、武田家が織田信長に滅ぼされると(天正10年、1582年)、真田家として独立し、ここから彼の艱難辛苦が始まります。

初め昌幸は信長の傘下に入りますが、その信長が本能寺の変で横死して、空白地帯となった信州に有力大名がなだれ込んで来ると、北条氏、継いで徳川家康と、次々と主君を代えていきます。そして、諸勢力の間隙を突いて信州上田の地に上田城の築城を始めました(天正11年、1583年)。

ここまで大戦を回避してきた昌幸でしたが、家康が北

条氏に昌幸の所領を勝手に割譲する約束をした時は、さすがに我慢がならなかったようで、徳川と一戦を交える覚悟を決めます。

### 第一次上田合戦

昌幸は、家康と敵対関係にあった上杉氏に信繁(幸村)を人質に出して和を結びます(天正13年、1585年)。これに激怒した家康は、上田城に7,000の兵を差し向けました。対して、昌幸は、長子の信幸(後に信之)を支城の戸石城に、また従兄弟を上杉氏の援兵とともに矢沢城に配し、自身は上田城にあって、徳川勢の来襲に備えました。総勢2,000と伝えられています。

両軍の衝突は、上田城南東の神川付近で始まりました。しかし、真田方の前衛隊は持ち堪えられません。逃げる真田前衛隊に、追う徳川勢。徳川勢が城内に一気に攻め込みます。徳川勢がそのまま城を抜くかと思われたその時、城内から昌幸の本隊が出現。徳川勢には周囲から矢や鉄砲が浴びせられ、徳川勢は一転して退却を始めます。

ところが、城内に巧みに配置された柵によって退路が遮られ、徳川勢は思うように撤退できません。なんとか城から出てきた徳川勢の横腹を、今度は戸石城から出た信幸が突きます。徳川勢は大混乱に陥り、神川まで逃れますが、昌幸、信幸、さらに矢沢城から出た兵に散々に追いまくられ、神川で多くの兵が溺死しました。このときの戦闘で、徳川方は1,300名の戦死者を出しましたが、真田方は40名程の被害だけだったと伝えられています。

戦の経緯には諸説あり、さらに後世の脚色、誇張が入っていると思われるのですが、徳川方で参戦した大久保彦左衛

門が、自軍の将兵を「ことごとく腰がぬけはて」「下戸に酒を強いたる風」となっていることから、真田方の圧勝であったことは間違いないようです。



上田本城と支城の配置

## 第二次上田合戦

時は下って関ヶ原の戦い（慶長5年，1600年）。真田家は、徳川方に付くか、大坂方に付くかの運命の選択を迫られます。このとき、親兄弟間で大激論が交わされますが、結局、石田三成と姻戚関係にある昌幸と、大坂方武将の娘を娶っていた次子の信繁（幸村）は、大坂方に付き、家康の養女を娶っていた長子の信幸は、徳川方に付くことになりました。

昌幸は、信繁をともなって上田城に戻り、2,500程（諸説あり）の兵で再び徳川勢を迎え撃つこととなります。相手は、徳川方の主力、38,000を率いる徳川秀忠です。

秀忠は、まず降伏勧告を行います。対して昌幸は、その勧告を受け入れる姿勢を見せませんが、それは時間稼ぎで、裏で着々と籠城戦の準備を整えます。数日を空しく過ごした後、昌幸の真意に気付いた秀忠は激怒。戦略的に攻める必要のない上田城を攻略しようとします。

結果は、第一次上田合戦と似たような経過をたどり、秀忠は攻城を諦めて西に向かいますが、肝心の関ヶ原の本戦に遅れてしまうという大失態をおかしてしまいました。

## 不朽の名声

徳川を散々に翻弄した昌幸でしたが、それがかえって災いし、徳川方圧勝の関ヶ原の戦いの後に、次子の信繁とともに高野山の九度山に配流されます。本来なら死罪のところを、長子の信幸による家康への必死の助命嘆願

で、命だけは助けられたのでした。

昌幸は、失意のうちに九度山で死去することになりますが、その死後、真田の武名は信繁がさらに挙げ、真田の家名は信幸によって守られることとなります。

まず、信繁（幸村）は、大阪の陣（慶長19年～元和元年，1614～1615年）にあたり、“親の七光り”で大阪城に入城しましたが（開戦前は、昌幸は超有名、信繁は無名でした）、大阪城真田丸で父昌幸を彷彿とさせるみごとな籠城戦を繰り広げ、真田の名を不朽のものとししました。

一方、兄の信幸（信之）は、第一次上田合戦の後は隠忍自重。暴れまわる昌幸と信繁とは対照的に、真田の家名を保つことに徹し、信州松代の真田藩10万石の基礎を築きあげました。

## 現在のの上田城について

昌幸の上田城は、第二次上田合戦の後に遺恨のある徳川によって徹底的に破却され、その痕跡は出土する遺物から推測するしかありません。現存する遺構は、信幸（信之）が松代に転封になった後に入った仙石氏の手によるものです。

廃藩置県の折（明治7年，1874年）、本丸にあった隅櫓7棟のうち、西櫓だけを残して解体、売却されました。これをさらに目黒雅叙園が買い取ったところを市民運動によって買い戻され（昭和17年，1942年）、現在の北櫓と南櫓として移築、復元されました。

北櫓と南櫓の間にある東虎口櫓門と袖壁は、古写真をもとに近年に復元されたものです。



南北両櫓と東虎口櫓門